

# 赤軍と白軍の狭間に

トロッキー 楠木俊訳 鹿岩社





赤軍と白軍の狭間に

トロツキー

楠木俊訳





前線におけるトロツキーとその装甲列車



赤軍と白軍の狭間に  
目次

献辞 6

序文 8

1

神話と現実 25

2

〈厳正なる中立〉 47

3

国内体制 65

4

警戒期 81

5

グルジャとヴランゲリ 86



6 終幕 96

7

政治的類型としてのゲルジャ・ジロンド 112

8

再論—民主主義とソヴェート体制 120

9

民族自決とプロレタリア革命 136

10

ブルジョワ世論・社会民主主義・共産主義 150

附 全世界の労働者へのゲルジャ・ソヴェート大会の宣言 169

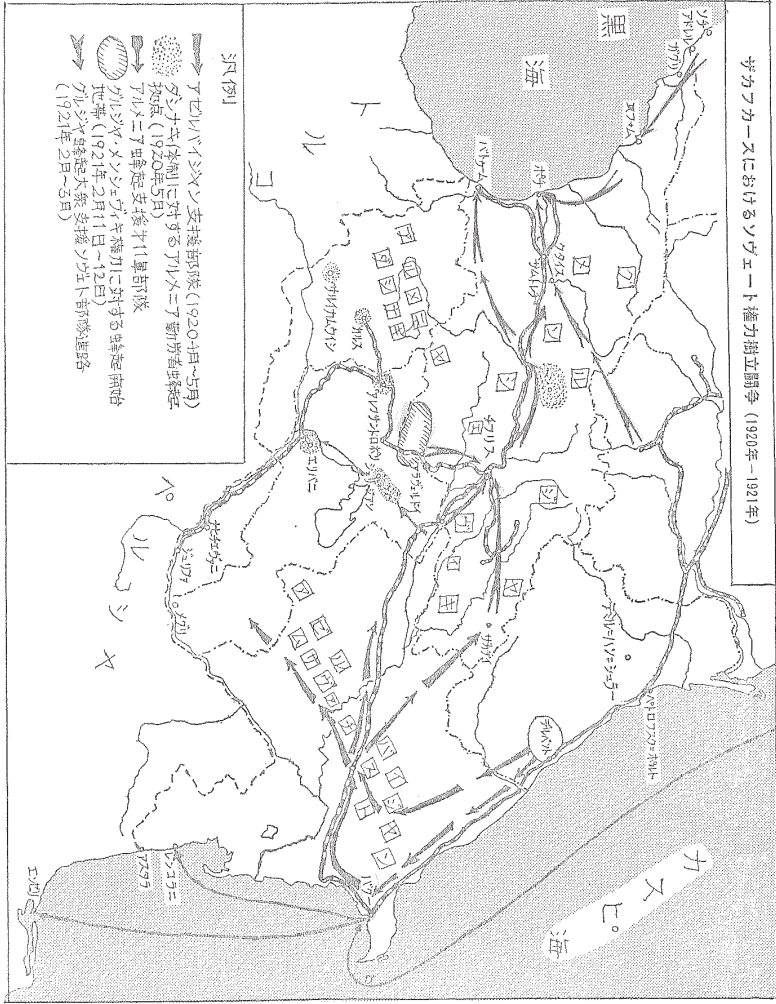
訳註 178

あとがき 185

凡例

\* ( ) は原書のものであり「」は訳者が言葉を補う場合に用いてある。  
\* 原註は各文節末に挿入してあり、訳註は巻末に一括してある。  
\* イタリック体は傍点を付してある。

サカカブカーヌにおけるソヴェート権力樹立闘争 (1920年-1921年)



汎例

- アルメニア軍 (1920年4月~5月)
- 11軍部隊 (1920年5月)
- アルメニア軍 (1921年2月11日~12日)
- 12軍部隊 (1921年2月~5月)

赤軍と白軍の狭間に

レオン・トロツキー

## 献 辞

一九一八年九月二〇日、ザカフカースに於けるイギリス当局、とりわけザカフカース・イギリス軍司令官陸軍少将トムプソンの承認と許可のもとに、アスハバート駐在イギリス軍事務使節団長ティーグ・ジョーンズによつてザカフカースのペレヴアル駅—アフチャ駅間の寂寥たる場所で、尋問も裁判もなしに銃殺された、ステュパン・シャウミヤーン、アレクセイ・ジャバリーゼおよび二四名の他のバクーの共産主義者たちの想い出のために——

一九一八年二月一〇日、チフリスのアレクサンドル公園に於ける集会の最中に、メンシェヴィキ政府の手で射殺された労働者たちの想い出のために——

ソヴェート体制をめざす闘争の中で、ザカフカース《民主》連邦政府、《民主主義的》グルジャのメンシェヴィキ政府、ザカフカース《民主主義》の同盟者たるサルタンの軍隊、メンシェヴィキ・グルジャの守護者たるホーヘンツォルレン家の軍隊、共産主義者に対するメンシェヴィキとの共同闘争のためグルジャに侵入したイギリス軍、グルジャ・メンシェヴィキに直接・間接に支援されたデエ

ニーキンおよびヴランゲリの白軍等の手で銃殺され、絞首され、拷問されて消えていった何十、何百、何千というカフカースの共産主義者たちの想い出のために——

グルジャ・メンシェヴィキ政府によって銃殺された、オセチヤ、アブハジヤ、アジャリヤ、グーリヤ等の農民叛乱の革命的指導者たちの想い出のために——

著者は、抑圧者、搾取者、帝国主義者、盗人、殺人者さらにそれらの政治的手先ぎや唯々諾々たる下僕どもの陣営から暗雲の如く発生している嘘言や中傷誹謗の正体を暴く目的をもって書かれた、本書を献げる。

## 序 文

これらの文章が書かれている現在、われわれは、ジェノア会議（一）に予定された時から三週間近くもほっておかれている。見たところでは、未だ誰も実際の会議の幕明けまでどれほどの時間がわれわれを隔てているのか断言はできない。この会議をめぐる外交的駆引きは、ソヴェート・ロシヤについての政治的煽動と密接に織りまぜられている。ブルジョワジーの外交政策とその社会主義との間には、分業の原則が正確に看とれる——外交政策は自己の陰謀を推し進め、他方では社会主義が労働者と農民の共和国に反対する世論を動員するというわけである。

この民主主義の目的は何か？ 革命ロシヤに可能な限りもつとも苛酷な税を課すこと、最大限度の賠償金を支払うよう強制すること、ソヴェート領土に対する私的資本の侵入を可能なかぎり広範囲に展開させること、労働者・農民に比して外国人およびロシヤ人の金持ち、工業家、高利貸どもに可能な限り最大限の特権を設けること、である。こうした要求をこれまで隠してきた仮面、すなわち《民

主義義》、《権利》、《自由》等々は、ちやうど商人が商品を陳列したり、売買したり、ヤードで計り売りしたりすることが必要な時に反物から包装紙を取り除くように、今やブルジョワ外交によってうち捨てられてしまった。

だが、ブルジョワの社会は、何物をも浪費することを許容しないものだ。《権利》という包装紙は、社会民主主義へと手渡された、というのは、たまたまそれが社会民主主義の特別好みの商品であり、いわば、商売道具だからである。第二インタナショナルは——そして後で述べられることは、その左翼的影法師である第二インタナショナルにも同様にあてはまるのだが——、ソヴェート政府が《権利》も《民主主義》も遵守しない以上、ロシアの劳苦する大衆は全世界の高利貸に抗するその闘争において支援されるに値しないのだ、ということをやつて証明しようとするやつきになっている。われわれは、周知のように、一〇月革命によって《権利》と《民主主義》とを冒瀆するといった恐るべき大罪を犯した。これが、われわれの原罪を意味している。最初の数年間ブルジョワジーは、剣を持って革命を粉碎しようとして試みた。現在、彼らは事実上の資本主義的修正を導入することで満足している。今やこうした修正の規模をめぐって闘争は集中しているのだ。

しかしながら第二インタナショナルはジュネヴァ会議に乗じて《権利》を回復しようと願っており、このことは、まったく明確な一つの計画——ソヴェート政府の《高利貸》や《独裁者》や《テロリスト》たちをジュネヴァに入れずに、代りにその席に憲法定定会議の民主主義的遺物を招聘する——を意味していたはずである。だが、そうした問題のたてかたはあまりにも馬鹿げたものであり、しかもそのうえ、それはブルジョワジーの計画に逆らうことになるだろう。第二インタナショナルは、民主主

制作中



赤霊と白霊の狭間に

発行日・昭和四八年七月一〇日第一刷

著者・トロツキー

訳者・楠木俊

定価・九〇〇円

発行者・天野洋一

発行所・株式会社鹿砦社◎一九七三年  
東京都千代田区神田駿河台三一―  
電話◎三―二九三―九八二―  
振替東京一六二六六郵便番号一〇―

印刷所・高長 製本所・美成社

装 幀・桑原伸之

訳者の了解により検印廃止  
落丁・乱丁は本社でお取り替えます